

北九州市立大学
文学部紀要

第94号

Of Mice and Men における実像と虚像
—Steinbeck の対読者姿勢を巡って

前田 譲治

北九州市立大学文学部
比較文化学科
2024

Of Mice and Men における実像と虚像— Steinbeck の対読者姿勢を巡って

前田 譲治

梗概

Of Mice and Men の2名の主要登場人物の人物像に関しては、出版以来、数十年にわたって、類似した解釈が批評家によって下され続けている。ただし先行研究は、特定場面のみを根拠として人物像の解釈を行なっているケースが目立つ。他方、本稿は、2名の人物像の正確な把握には作品全体の俯瞰が不可欠な点と、作中人物の実像の把握を困難にする多彩な設定が作中に縦横に張り巡らされている事実を明示した。この点を踏まえ、読者を虚像の把握へと誘う点にこそ本作の本質が存すると指摘した。他方、スタインベックは自作への読者の反応に極めて批判的で、読者への対決姿勢を露わにすることが多い。この点が、読者を虚像に誘導する方向性を作中に導入した要因であると考えられ、本作の作品構造はスタインベックの対読者感情に強く支配されていると結論付けた。

キーワード

John Steinbeck, *Of Mice and Men*, George Milton, Lennie Small, Slim, Curley's wife, Candy

序論

Of Mice and Men (1937)¹ の主要登場人物、渡り労働者の George Milton と Lennie Small の人物像に関する批評家の解釈には一貫性が際立っている。具体的に確認すると、『二十日鼠』出版直後の雑誌や新聞に掲載の短評において、2人の関係の本質は“love” (Brighouse 92)、“friendship” (Collins 91, Wagner 73)、“affection” (Weeks 91) と指摘されている。また、ジョージは、“faithful companion [of Lennie]” (Oliver 75) と評され、レニーの保護者の人物と一貫して解釈されている (Butcher 75, Collins 90, *London Mercury* 93, Marsh 80, Moore 87, Oliver 75, Pritchett 93, *San Francisco Call* 77, *Times Literary Supplement* 93)。あるいは、ジョージのレニーへの愛情も指摘される (Collins 90, Gannett 73, S.W. 89)。他方、レニーに関しても、“the principle of good” (Canby 76)、“well-meaning” (Marsh 80)、“a kindly soul, harmless” (Oliver 75)、“lovable” (Thompson 86) など、人格を肯定する声がいずれも際立っている。

以上に確認できた、2人の善良性と友愛に焦点を当てる出版直後の批評の動向は、数十年後においても、変化がない。具体的には、2人の関係の本質は、“brotherly mutual concern and faithful

¹ 以降、作品名は『二十日鼠』と略記する。また、作品名と人物名は初出のみ英語で記す。

companionship” (Goldhurst 52)、“friendship” (McCarthy 58, 59)、“deep mutual commitment” (Owens, *John* 102) と指摘されている。ジョージに関しても、レニーへの保護者的姿勢が指摘され続けている (Astro 105, French, *John Steinbeck* 89, Levant 135, McCarthy 59, Parini 228, Rascoe 61)。またジョージのレニーに対する責任感の強さ (Hadella 47, Lisca, *Wide* 141, Owens, *John* 104, Rascoe 61)、優しさや愛情 (McCarthy 59, Rascoe 61)、“sacrifices” (Lisca, “Escepe” 82) も指摘されている。その一方で、レニーのジョージへの忠誠心も注目を集めている (Fontenrose 54, Lisca, *Wide* 141, Rascoe 61)。他にも、“Lennie in turn has come to love the person [George] who is all things to him” (McCarthy 59). との指摘がある。このように2人の絆の強さが、時を越えて指摘され続けている。

2人の人柄の解釈に目を向けても、ジョージに関しては、“compassionate” (Goldhurst 49)、“a good man”、“a representation of humanity” (Levant 135)、“humanitarian” (Rascoe 61) と、肯定的評価が続く。レニーについても“childlike innocence” (Levant 135)、“a sympathetic figure” (Rascoe 61)、“kindness” (Timmerman 100) が指摘されている。このように人格が肯定されているレニーは、殺人を犯す。しかしながら、殺人を犯すレニーに悪意や責任性はないとの解釈で批評家は完全に一致している (Astro 105, French, *John Steinbeck* 89, Goldhurst 49, Jackson 79, Levant 134, Lisca, *John* 77, 82, McCarthy 60, Owens, *John* 103, Parini 229, Rasco 61, Spilka 62, *Times Literary Supplement* 93-94, Timmerman 100)。さらに、レニーを殺人に駆り立てる要因として、“love” (French, *John Steinbeck* 89, Lisca, *John* 82) と“affection” (Levent 139) が指摘されている。加えてレニーは“nonviolent”とも評される (Loftis 43)。このようにレニーが犯す殺人に罪悪性を指摘する声は絶無である。

以上の通り、2人の人物像の解釈には、数十年の時間の経過後も変化が認められず、愛他的な相互関係が、善意を本質とする2人の間で確立されているとの解釈が定着している。ただし、以上の解釈は大半が、特定場面における作中人物の言動を論拠としてなされ、作品全体の俯瞰には基づいていない。そこで、先行研究における2人の人物像の解釈の妥当性を、作品全体を視野に入れつつ再検討したい。この考察を出発点として、作中と書簡集において読み取れる *John Steinbeck* の読者への認識を視野に入れつつ、作品全体を統括している作者の意匠の本質を明確化したい。最終的には『二十日鼠』における作者の対読者姿勢の本質を明示したい。

I レニーの人物像の本質

皮切りとして、知的障がいを持つレニーの人物像の本質を検討したい。レニーは、鼠の死骸 (14-15, 20-21)、農場の労働者のリーダー Slim から得た子犬 (70, 76-77, 90, 97)、農場のオーナーの息子 Curley の妻の頭髪 (157) に強く執着する。それらの触感が快感をレニーに提供するからだ。さらにレニーが最も強固な執着を示すのも、触感による快感が得られる兎 (155-56) を将来飼育することだ。彼が自発的に行なう発言の大半も、触感による快感につながる事物 (子犬、兎など) に関して

いる (13, 22, 27, 33, 66, 99-100, 119, 120, 121, 123, 131, 132, 149, 153)。このようにレニーの思考活動は、触感から得られる快感の希求に完全に統括されている。以上を踏まえ、レニーとジョージの関係を考察したい。

まずレニーは、ジョージを話題にする際に、彼を兎の飼育を可能にしてくれる人物と常に捉えている (56, 115, 129, 132, 140, 147-8, 149, 151, 155, 158)。加えてレニーは、致命的な問題 (殺人) を起こしたことが原因で、ジョージが兎を飼育させてくれる可能性が消失したと確信するや、“‘I might jus’ as well go away. George ain’t gonna let me tend no rabbits now’” (176). と独白し、ジョージとの決別を躊躇なく宣言している。さらには、子犬をジョージの仲介で入手すると、レニーは子犬の触感を楽しむことに異常に耽溺し、付き従っていたジョージに一転して無関心になる (70, 78)。その際に、レニーの服従の対象は、ジョージから、子犬を提供してくれたスリムへと遷移する (97)。以上のレニーの言動から、レニーはジョージを、触感による快感を得るための仲介物として、すなわち、自己の究極利益の実現のための手段として位置付けている可能性を否定できない。この点を視野に入れつつ、以下の、作品序盤でのレニーのジョージへの対応を分析したい。

[Lennie] had sensed his advantage. “If you [George] don’t want me, you only jus’ got to say so, and I’ll go off in those hills right there. . . .”

George said, “I want you to stay with me, Lennie. . . . No, you stay with me. . . .”

Lennie spoke craftily, “Tell me—like you done before.”

“Tell you what?”

“About the rabbits.” (27)

上記対話においてレニーがジョージとの決別を示唆すると、それまで居丈高だったジョージは急に弱気になり、一転してレニーに懐柔的姿勢を示す。するとレニーは、ジョージに対して得られた優位性を活用して、彼が熱望する兎に関する語り (レニーにとっては、語りの中の兎は、現実の兎と同等の存在感を持つ) をジョージに要求している。その結果、ジョージはレニーの要求を受け入れ、兎に関連した話題を語り始める。このようにレニーはジョージの弱気に露骨に付け込んで、欲望充足を目指してジョージの行動を操作している。しかもレニーは以下の通り、作品終盤でも同じ戦略を採用しており、恒常的にジョージを利己的立場から操作していると推測できる。

“Well, I can go away,” said Lennie. . . .

George shook himself again. “No,” he said. “I want you to stay with me here.”

Lennie said craftily—“Tell me like you done before.” (180)

以上の2つの会話において、作者は共に、“craftily”（下線部は筆者）という副詞でレニーの口調を修飾しており、レニーの狡猾性を意識しつつ叙述を展開している。このような作者の姿勢は、上記場面において（27, 180）、レニーがジョージを利己的立場から操作しているとの本稿の解釈を裏付ける。

以上に確認できた、レニーの利己的姿勢は別視点からも指摘できる。レニーは怒りを伴った暴力性を4回、発露する。しかしながら、この客観的事実が、先行研究において注目されることは一切なかった。他方、本稿は、レニーの怒りと暴力性が表出する際の法則性に注目することによって、レニー像の本質が明確化するととの立場を取る。最初にレニーの暴力性が表出するのは、土地を入手する2人の夢が実現した後の情景をジョージが夢想しつつ語る場面だ。その場面でジョージは、“‘We’d have a setter dog and a couple stripe cats, but you gotta watch out them cats don’t get the little rabbits’” (103). と口述する（下線部は筆者）。すると、それを聞いたレニーは“‘You [George] jus’ let ’em [cats] try to get the rabbits. I’ll break their God damn necks. I’ll . . . I’ll smash ’em with a stick.’ He subsided . . . threatening the future cats . . .” (103). と反応する。レニーは、ジョージの語りの中に登場する、兎を捕食する可能性がある猫に、殺意を含んだ怒気を示している。このように、レニーが最初に怒気と暴力性を示すのは、兎の飼育（触感による快感の享受）を阻害する存在に対してなのだ。

3回目にレニーの暴力性と怒りが向けられるのは、彼が誤って殺した子犬に対してだ。その場面でレニーは、“Suddenly his anger arouse” (148). との描写の直後に、死んだ子犬を投げ放っている (148)。この反応が生じたのは、子犬を死なせたことがジョージの機嫌を損ね、その結果、レニーに兎を飼育させるとの約束をジョージが反故にするだろうとレニーが憶測したからだ (148)。つまり、死んだ子犬と、兎飼育が不可能になる将来とが、レニーの脳裏において結合している。このようにレニーは、死んだ子犬が兎飼育を阻害すると認識したため、子犬に対して怒りと暴力を向けている。そうであるならば、レニーの2回に及ぶ、怒りと暴力性の発露 (103, 148) は、同一経路の下に生じている。

次に馬屋係 Crooks が、“‘S’pose George don’t come back no more. . . . What’ll you [Lennie] do then?’” (124)、 “‘S’pose he [George] gets killed or hurt so he can’t come back’” (125). とレニーに述べ、外出したジョージが死傷し不帰となる可能性を仄めかす場面を取り上げたい。その際にクルックスは、“‘They’ll take ya [Lennie] to the booby hatch. They’ll tie ya up with a collar, like a dog’” (126). と述べ、ジョージが不帰となった後に予想される、レニーの苦境を強調している。その発言に対してレニーは“mad”、“walked dangerously”と反応し、その在り方はクルックスが危険を感じるほど (126)、狂猛である。（これは作中で2度目の、レニーの怒り／粗暴性の発露となる。）一方、怒気に駆られたレニーは、クルックスに “‘Who hurt George?’ ”、 ‘Ain’t nobody goin’ to suppose no hurt to George’ ”

(126).、さらに“‘Ain’t nobody goin’ to talk no hurt to George . . .’”(227). と応答している。このようにレニーは、彼の苦境をクルックスが指摘したにもかかわらず、それには全く頓着せず、ジョージの身の安全のみを強く心配している。そのためレニーの怒りと暴力性は、ジョージの身の安全を脅かす存在を対象としていると判断するしかない。その結果、自分が被る害悪以上に、ジョージの不利益を案じるレニーの姿が印象付けられる。従って、この場面に限局して判断すると、利己主義の対極に位置する、友情と利他性に篤いレニーを指摘する以外の選択肢はない。

一方で既出の通りレニーは、ジョージの仲介によって子犬を入手した後は、子犬の触感の快感に耽溺し、一転してジョージに無関心となる(70)。ジョージもレニーが子犬(の触感)に心を奪われ、彼の命令を無視することを確認している(70)。その後レニーは、ジョージが兎を飼わせてくれる可能性が消失したと確信するや、躊躇なく彼との別離を宣言する(176)。つまり、レニーがジョージに従順性を示すのは、自身の利益(動物—特に兎—の触感の享受)のジョージを通しての実現が期待できる間のみであり、愛他性ゆえではない。そうであるならば、兎入手を可能にするジョージの喪失、すなわち、レニーにとっての究極的利益の棄損をクルックスが示唆したため、クルックスはレニーの暴力性と憤怒の対象となったと解釈すべきである。このように、レニーの怒りと暴力性が、触感がもたらす快感への執着に起因していると捉えると、その表出の経緯には、3回とも完全な統一性が見いだせる。この一貫性を念頭に置くことによって初めて、レニーによるカーリーの妻の殺害の本質が判明する。

その殺害場面において、カーリーの妻の髪に触れる機会を得たレニーは、その触感に恍惚となり、髪を乱雑に掴んでしまい、それに対する彼女の制止も無視する。そのため、彼女は叫び声を発し続ける。その際にレニーは、彼女が悲鳴をあげたことがジョージの不機嫌を招き、それが原因となって、兎を飼わせるとの約束をジョージが反故にすることを、強く危惧している。レニーはその危惧の念を、断片的発言も含め、5回も表白している(157-59)。このように、妻の叫び声を耳にしたレニーは、悲鳴をあげる彼女を、兎の飼育を阻害する存在と明確に位置付けている。そのように認識した彼女に対して、レニーは“Then Lennie grew angry”(158).、“[H]e was angry with her”(158). と明確に怒りを露呈し(4回目)、直後に絞殺する。これ以前に見られたレニーの3回の怒り(103, 126, 148)の特性を再確認すると、全てが明確な暴力性を伴い、かつ、その対象は、レニーの兎飼育を阻害する存在に限定されていた。しかも兎を捕食する猫に対する怒りには、殺意が混在していた(103)。このような利己性がレニーの怒りに内在する以上、その怒りの対象となった彼女の殺害は意図的と解釈する他ない²。この解釈を裏打ちするのが以下の伏線だ。

² レニーは怒りが収まるや、彼女に異変(死)をもたらしたことが大問題であることは即座に理解できている。その際も、大問題を起こしたことによってジョージが機嫌を損ね、それが原因で、兎を飼えなくなるとの予見にレニーは心を奪われている(176)。このように、兎飼育への欲望がレニーの想念を支配する在り方は、レニーが妻を殺害した後も顕著に認められる。

レニーは以前に働いていたウィードで女性にしがみ付いた過去があり、その際にも女性は悲鳴をあげている。つまりレニーは、カーリーの妻との間に生じたのと同じのトラブルを、過去にも体験している。ところが、その際のレニーは叫び声をあげる女性に“so scared”と怯えるのみで、怒りと暴力性の発露は全く行わず、女性は完全に無傷で済んでいる(75-76)。このように、カーリーの妻とウィードの女性は、彼女たちを掴んだレニーに対して等しく悲鳴を発するも、各々への、レニーの対応は劇的に異なっている。この格差が生じた理由は以下の通り、作品内容に即して合理的に説明できる。

まず、現在働いている農場に到着する前日に、農場で悶着を起こした場合は兎を飼わせる許可を取り消す旨、ジョージはレニーに強く警告している(32)。この警告を、兎への執着心が強いレニーは深刻に受け止め、警告はレニーに強迫観念として定着している(56, 115, 148, 151, 158)。このように、ジョージが警告を発して以降、その警告はレニーの心理を継続的に強く支配している。そのような警告以前に、ウィードの女性との悶着は起きている。そのため、ウィードの女性はレニーの行動が原因で悲鳴をあげるも、その女性が、兎飼育の機会の喪失を招くとの認識にレニーは至らない。そのため、カーリーの妻とは異なり、ウィードの女性はレニーの怒りを喚起せず、従って無傷だったのだ。つまり、兎飼育を妨害する存在としてレニーに認識されるか否かによって、悲鳴をあげる女性の殺害の有無が決定されている。従って本稿は、序論で概観した、カーリーの妻の殺害は意図的でないと解釈し、レニーの善良性に焦点を当てる先行研究には与しない。利己心に根差した暴力性の発露を示すのが、レニーの本質と解釈すべきである。以上の通り、作品全体を鳥瞰しつつ分析した場合、レニーの本質は、自己の利益の実現に対する執着心の強靱さとなる。

II ジョージの人物像の本質

次に、レニーとの人間関係を視野に入れつつ、ジョージの人物像の本質を精査したい。最初に、農場のオーナーの息子カーリーに対するジョージの対応に着目したい。カーリーは小柄な体型に劣等感を抱いているため、大柄なレニーとの初対面の際に、露骨に敵愾心と攻撃性を示す。この状況を受けてジョージは、カーリーが去った直後に、彼と距離を保つようレニーに警告する。その警告にレニーは、“I ain't gonna say a word”(55)、“I won't say a word”(56)と応答する。これらのレニーの応答は、農場到着前にジョージがレニーに複数回下した、オーナーの前での発話を禁止する命令(16, 31)を念頭に置いている。このように、カーリーに関するジョージの警告をレニーは全く理解できていない。それにもかかわらずジョージは、警告の真意をレニーに理解させる努力を一切行っていない。つまり、レニーの身の安全に関するジョージの配慮は十分とはいえない。

それどころか、同一場面においてジョージは、レニーが致死的な怪力を有するのを知りながら、“[I]f the son-of-a-bitch [Curley] socks you [Lennie] let 'im have it”(56)と述べ、カーリーとの諍いが

生じた際の反撃を、レニーに奨励している。そのジョージは、“‘... Lennie don't know no rules’” (50). と、レニーの怪力は抑制が効かない点を把握している。そのようなレニーがジョージの指示通りに反撃した場合、カーリーに致命傷が生じる恐れがある。その場合、レニーは私刑に処される可能性が高い。この展開をジョージが予見している点は、カーリーとの初対面直後に、事前に決めていた、レニーが問題を起こした際に向うべき隠れ場を、ジョージがレニーに複数回確認させていることから分る (56-57)³。このようにジョージは、レニーの命を危険に曝すことを躊躇しない。この点は、以下のジョージの言動にも読み取れる。

初対面から時を置かずしてカーリーは、レニーとジョージが休息中の部屋を再訪する。その際のカーリーは、妻の探索に没頭し、ジョージとレニーの存在は全く眼中にない。そのカーリーに、ジョージは率先して“coldly”、“insultingly”との口調で話しかけ (67)、それが原因で、カーリーは2人の存在に気付いている。この際のカーリーは妻の不貞への疑念から目に見えて不機嫌である。カーリーがレニーに既に示した不条理な敵意を視野に入れれば、ジョージの侮辱的口調が原因で、カーリーの憤怒の喚起、カーリーのレニーへの攻撃、レニーによる反撃、レニーの私刑へと展開する危険性がある。ここにも、レニーの身の安全への無配慮がジョージには指摘できる。

その後、ジョージとレニーに遭遇 (3 度目) した際に、不機嫌の極致にあったカーリーは、レニーが至福の表情を偶然浮かべていたことに激怒し、無抵抗のレニーを猛烈に殴打する。その際にスリムがカーリーの制圧を試みるが、ジョージはスリムを制止する。ここでレニーの救済を試みたスリムは、労働者の中で最も人望が厚く、労働者全員への影響力が強い人物である (62)。実際にスリムに対しては、カーリーですら、他の労働者に対する場合とは異なった遜った態度を取り (109)、ジョージ自身もスリムには一目置いている (66)。このような、悶着に介入する最適者であるスリムが目指したカーリーの制圧を、ジョージは妨害している。その直後にジョージは、殴打される一方のレニーに、カーリーへの反撃を3回も指示している (111)。このようにジョージは、レニーの怪力を活用したカーリー攻撃を目指している。

ここで、ジョージが初対面時のカーリーに猛烈な嫌悪感を示し (50-52)、2 回目の遭遇の後にも、“‘... I'm scared I'm gonna tangle with that bastard [Curley] myself. I hate his guts’” (68). と発言していることに注意したい⁴。そうであるならばジョージは、個人的な嫌悪感に駆られて、レニーの怪力を活用したカーリー攻撃を実施している。しかも、既出の通りジョージは、レニーがカーリーに反撃した際には、レニーが私刑に処せられる可能性が生じることを認識しており (56-57)、ジョージはレニーの生命を危険に曝している。このように、ジョージのレニーへの攻撃命令は、利己的側面が

³ ジョージのこの対応は、レニーが行動を制御できなかったことが原因で、以前に働いていたウィードで私刑に処される寸前に至ったことを踏まえていると推測できる。

⁴ ジョージがカーリーに対して示す強烈な嫌悪感の本質については後述する。

際立っている。次いで、ジョージがレニーと共存することの意義を考えることにより、ジョージの人物像をさらに鮮明化したい。

最初に、2人が農場に到着した際にオーナーが、ジョージに対して不機嫌を露わにする場面に着目したい。オーナーの不機嫌の真因は2点ある。1点目は、前夜にジョージが意図的に野宿を選択したため、2人が契約書に明記された時間に大幅に遅れて到着し、その結果、午前中の農作業に支障が生じたことだ (35, 40)。2点目は、レニーが知的障がいを持っている事実を隠蔽する目的で、ジョージがレニーに、オーナーの前での発言を強く禁じた結果、レニーの沈黙に不信を抱いたオーナーが、ジョージによるレニーの賃金の搾取を疑ったことである (43)。つまり、オーナーの不機嫌は全てジョージの判断に起因している。ところがジョージは、オーナーが立ち去った後に、“‘So you [Lennie] wasn’t gonna say a word. You was gonna leave your big flapper shut and leave me [George] do the talkin’. Damn near lost us the job’ ” (44). とレニーを叱責する。ジョージは、オーナーの前でレニーが僅か一言を発したことを咎めているが、レニーがジョージの指示に従って、ほぼ沈黙を貫いたことが、オーナーの印象の悪化を招いたのが実情である。それにもかかわらずジョージは、レニーの一言のみの発話をオーナーの不機嫌の主因と強弁している。しかも、レニーは昨夜、野宿せずに農場に直行することを主張していた (18)。このレニーの主張に従っていれば、契約に定められた時刻に2人が遅刻することはなかった。その主張を、“‘No reason at all for you. I like it here’ ” (18). と感情的に拒絶し、翌朝の到着を頑強に主張したのもジョージだ。つまりジョージは、自己の失態の責を、全てレニーに転嫁している。この在り方は、“[George] uses Lennies selfishly, draws from him a sense of power, of superiority, which he sorely needs” (Spilka 62). との形で、先行研究においても注目されている。やはり、ジョージのレニーへの対応には利己性が際立っている。

以上に加えて、レニーがカーリーの妻を殺害し、レニーが私刑に処されることが確定した直後にジョージが、“‘I guess maybe way back in my head I did [knew]’ ” (163). と独白している点に注目したい。つまり、レニーとカーリーの妻との間に惨事が発生することを、ジョージは事前に予期していた。加えて、カーリーの妻の存在が孕む危険性を本能的に察知したレニーは、ジョージに対して、農場からの退去を強く要求していた (60-61)。それにもかかわらずジョージは、貯蓄の必要性を根拠に、農場に留まり続けていた。しかしながらジョージは、週末に街の cat house に他の労働者と出向いており、額は不明ながら浪費している。また、カーリーは農場のオーナーの息子であり、レニーとカーリーとの間に悶着が起きれば、2人は解雇される可能性が高い。それにも関わらず、既出の通り、ジョージはレニーの怪力を利用してカーリーに攻撃を加え、その結果カーリーは重傷を

負っていた⁵。このようにジョージは2人の解雇を招きうる行動に安易に出ている。つまりジョージは、蓄財を口実に危険な状態にレニーを留め置く一方で、蓄財を阻害する行動を繰り返している。以上も、ジョージのレニーへの友愛の希薄さを物語る。

ただし、以上の論考への反証と映る出来事も認められる。それは、過去にウィードでレニーが女性の体にしがみつき、その女性の虚言によってレニーが冤罪に陥れられた際に、ジョージはレニーの逃亡を支援し、レニーへの私刑を回避したことだ。この展開においてジョージは利他性に徹している。ただし、ウィードの女性はレニーのみを冤罪に陥れようとしており、ジョージが冤罪に巻き込まれる可能性は皆無であった。他方、カーリーの妻を殺害したレニーが、ジョージの指示に従って行動している事実はカーリーに把握されている(48)。ゆえに、レニーの殺人から、ジョージに冤罪が及ぶ可能性がある。そのため、第一発見者の雑役夫 Candy によって殺害現場に案内されたジョージは、キャンディと共に殺人を皆に知らせることを忌避している。彼は、一定時間が経過した後殺人を皆に知らせようキャンディに指示した上で、殺人現場から離れて同僚の所に戻っている(165)。このようにジョージは、自身に冤罪が及ぶことを強く警戒し、殺人現場に居合わせていなかった事実を慎重に周囲に印象付けており、保身に腐心している。同時にジョージは、キャンディが殺人に関して皆に伝えるまでの僅かな時間を利用して、レニーを射殺するための銃を同僚の Carlson から盗んでいる⁶。つまりジョージはレニーの殺害を即断しており、危険が伴うもののレニーの生存の余地は残される、共に逃亡するという発想が全くない。このように、ジョージがレニーに利他性を示すのは、保身が可能となる状況下に限られる。

以上の通り作品全体を客観的に分析すると、ジョージ、レニー共に、自己の利益に固執する姿勢が目立っており、利己性が2人の人物像の本質的側面と判断せざるをえない。さらに2人には相方を、利己的立場から利用する側面も認められた。このような考察結果とは相反する解釈が、序論で確認した通り、2人に対してなされ続ける理由を、以下に考察したい。

⁵ レニーがカーリーに重傷を負わせた直後にジョージは、2人して、解雇されることを覚悟している(113)。しかしながら、偶然その場に居合わせたスリムが機転を利かせて、重傷に関する事実を口外し辛くなる心理状態に、カーリーを巧みに誘導している。その結果、レニーがカーリーに重傷を負わせた事実は皆に知られず、ジョージとレニーは解雇を免れる。従って、ジョージがレニーの怪力を利用してカーリー攻撃を行った後に、二人が解雇を免れたのは、偶然の産物に過ぎない。

⁶ ジョージはレニーを射殺した直後に、銃を盗んだのはレニーなのか、カールソンから確認される。その際の彼の返答は、“‘Yeah, he [Lennie] had your [Carlson’s] gun’”(185)である。ジョージは“‘Yeah’”と一言、返答すれば事足りたはずだが、その後には敢えて、レニーに関する具体的な虚偽説明を付している。他方、ジョージがレニーを射殺するためにカールソンから銃を事前に盗んでいた事実が知られると、ジョージが他の労働者に先んじてカーリーの妻の殺害を知っていた事実が露見し、殺人との関与を疑われる。ジョージは、このような事態の回避を、虚偽説明の付言によって確実にしている。ジョージによるレニーの銃殺自体は、多数の評者が一致して指摘する通り(後述)、レニーへの無慈悲な私刑を回避する点で、レニーへの友愛に基づいた行動と解釈できる。その一方で、保身を確実にするため、死亡したレニーに冤罪を着せ、彼の人格を棄損するジョージの姿を、作者は同期させている。それゆえ、ジョージのレニーへの愛他的行為は、利己的行為によって一定範囲、相殺される構成となっている。

Ⅲ 読者の錯誤が生じる経路の多様性

最初に、2人の人間関係の本質の把握が読者にとって困難となる要因を明確化したい。作品冒頭部での2人の描写を確認すると、レニーは、触感を楽しんでいた鼠の死骸をジョージから没収されたことを悲嘆している(20-21)。他方、ジョージは下した命令にレニーが即座に従わないことに苛立ち(19-23)、レニーとの共存から生じる不自由や不利益を延々と嘆いている(23-25)。このように2人は共に、相方からフラストレーションを感じている。さらに、レニーの発話は、触感による快感への欲望に支配されることが多いため、2人の会話は大半が噛み合わない。このように冒頭部は、2人の人間関係の不調和が基調となる。しかしながら、その後、2人は将来の土地獲得の夢について唱和する(28-30)。その際には、夢への憧憬の念によって、2人は完全に精神的に一体化している。この状況は、直前の不調和との対照性が際立つため、読者にとって印象的に映る。

また2人は将来の夢を語る際に、数センテンスごとに語りを頻繁に交代するが、2人の発話は常に完全に整合している。しかも、発話において2人の互助関係を特に強調する台詞には、“*... I [Lennie] got you [George] to look after me, and you got me to look after you ...*”(29)。と、例外的な斜字体が採用されている。さらに夢の唱和は、冒頭(28-30)、中盤(100-03)、終末(182-83)と、3回も同一の様態で反復されている。以上の通り、例外的に成立している2人の精神的調和を、読者の記憶に刻印するための多彩な設定が準備されている。その結果、唱和の様子を根拠として、2人の人間関係の調和が度々指摘されている(Goldhurst 52, Levant 141, Lisca, John 79, Parini 228)。しかし夢の実態を客観的に観察すると、批評家による指摘とは異なった実情が見えてくる。

まず、2人が共有している、土地を獲得する夢の、レニーにとっての本質を確認したい。既に確認した通り、動物の触感を通して得られる快感をレニーは常に希求している。従って、レニーの夢の本質は、得られた土地で飼育される兎の触感を存分に楽しむことにある。他方、ジョージが夢に期待するのは、土地所有に付随する、自由や自立性、他者への支配力であり(103)、レニーの嗜好との共有点は一切ない。逆に、ジョージの夢において、兎は食用であり、販売や屠殺の対象となる(101, 103)。ところが、ジョージが語る夢の風景の一部として登場する、兎を捕食する猫に、レニーは狂猛な殺意と暴力性を示していた(103)。つまり、兎を屠殺、販売の対象と位置付けるジョージは、猫と同じく、レニーの暴力の対象となる可能性を否定できない。そうであるならば、一見円満になされていると映る、夢の唱和には、夢が実現した際の2人の衝突の不可避性が潜在している。しかし、この実情は、夢を語る際の2人に完全な調和関係が成立しているため、読者は把握しづらい。

加えて他の作中人物の描写は、レニーとジョージの人間関係を一様に美化する。例えばクルックスとカーリーの妻は共に、レニーと2人きりの際に、話し相手の不在が招く孤独の辛さを訴え、異常に饒舌にレニーに語り掛けている。彼らの描写は、発話行為の人間にとっての必要性を印象付け

る。その上、クルックスは、“‘A guy goes nuts if he ain’t got nobody. Don’t make no difference who the guy is, long’s he’s with you. . . . I tell ya a guy gets too lonely an’ he gets sick’ ” (127). と、共存が人間の精神衛生上、不可欠であることを強調する。人間にとっての対話の意義の大きさを印象付ける、2人の言動と対置された場合、ジョージとレニーの会話が絶えない関係は無条件で理想化される。

さらに、クルックスは彼の発言が誘発したレニーの懊悩に歓喜し (125)、カールソンや Whit は農場での諍いを歓迎している (96)。あるいは、農場の余興として、体が不自由なクルックスは、片手の使用を禁じられた状態の労働者 Smitty との乱闘を過去に強いられ、その時の状況を回想するキャンディは愉悅に浸っている (39)。以上のような、他人の精神的、肉体的苦痛を歓迎する空気の中では、そのような感性とは無縁の、レニーとジョージの人間関係は美化される。さらに本作は、レニーを射殺した直後の懊悩するジョージと、彼を慰撫するスリムに関する、“‘Now what the hell ya [Curley] suppose is eatin’ them two guys [George and Slim]?’ ”(186) という、カールソンの問いかけと共に終了する。カールソンは、ジョージとレニーが長期間、共存していることを知っており、この発言は冷酷極まりない。さらに、その直前には、ジョージによるレニーの殺害に、カーリーが狂喜している。このように終末部に集積されている醜悪な言動は、対照性ゆえに、ジョージがレニーを射殺する直前に示す配慮（後述）を際立たせ、2人の関係を美化する。以上の通り、作中人物の描写の多くは、レニーとジョージの人間関係を読者が客観視することを困難にするよう計算されている。

さらに作品冒頭の2人の関係に注目すると、レニーはジョージの行動を繰り返し忠実に模倣している (11, 17, 37-38)。その一方で、ジョージは川の水を飲むレニーの健康を慮り、淀んだ川水を摂取しないよう指導している (10-11)。さらに彼は、レニーとの共存関係から生じる不利益を、延々と嘆いている (23-25)。他方、2人の人物像の本質の判断の根拠となりうる情報は作品冒頭には登場しないため、冒頭場面に限定して判断すると、ジョージを保護者、レニーを彼に忠実な人物と評価する以外の選択肢がない。当然、このような、冒頭部で印象付けられる2人の関係は、以降の読者の作品の読解に相応の影響を及ぼすだろう。以上の通り、2人の人間関係の実相の把握を困難にする多彩な設定が入念に準備されている。

次に、レニー像の把握を困難とする設定について確認する。ジョージが悪戯心から川への投身をレニーに命令したところ、即座にレニーが命令に従ったとのジョージの回顧がある (73)。この回顧を単独で眺めると、ジョージに対するレニーの忠実性を指摘する以外の選択肢がない。他方、カーリーの殴打によって重傷を負わされた際のレニーは、自分の肉体の損傷や苦痛には無頓着である一方、カーリーとの悶着が生じたことが原因で、兎の飼育をジョージが不許可にすることを強く懸念している (115)。ここには、身の安全以上に兎の飼育を重視する、レニーの感性を読み取れる。このレニーの感性を踏まえれば、レニーが川に投身したのは、不服従によってジョージの機嫌を損

ね、兎が飼えなくなる事態を回避するためと解釈するのが妥当だ。つまり、レニーの川への投身は自己の利益を保全しようとする意識に支えられている。この解釈は、レニーがジョージに不服従を示す事例は全て、動物の触感へのレニーの執着に端を発している事実⁷により裏打ちされる。以上の通り、一場面に限局して判断を下した場合と、作品全体を俯瞰した場合とでは、各々、全く異なったレニー像が把握される作品構成が採用されている。類似した構成は、他にも複数、認められる。

レニーはカーリーから殴打された際に、カーリーを容易に怪力で制圧できる優位性を持ちながら、自発的反撃は一切行わず、ジョージに複数回命令された後に不承不承、反撃している。その反撃後もレニーは、“‘I didn’t wanta . . . I didn’t wanta hurt him [Curley]’” (113). と主張している。さらにレニーには、自分に重傷を負わせたカーリーを咎める感覚が一切ない。この場面に限定すればレニーは、攻撃性や憎悪の念とは完全に無縁と映る。しかし、このようなレニーの柔和な姿勢が生じたのは、身体的危害を加えたカーリーを、兎の飼育を阻害する存在としてレニーが認識しなかったためだ。他方、作品全体の俯瞰に基づいて既に確認した通り、兎の飼育を間接的にであれ阻害する存在に対してレニーは、一貫して憤怒と暴力性を示していた。やはり、単独の一場面のみに焦点を当てた解釈では、レニーの実像を的確には把握できない。

既出の、レニーがクルックスに怒りと粗暴性を示す場面に関しても (126)、この場面に限局すると、自分の身の安全以上にジョージの無事を願う、レニーの友愛の篤さしか読み取れない。他方、作品全体を鳥瞰すると、レニーがクルックスに対して示す怒りと暴力性は、利己性に起因していることが分った。以上の通り、単独の場面に限定してレニー評価を行うと虚像に誘われ、作品全体の俯瞰によって初めてレニーの実像が判明する構成で本作は統一されている。

次に、レニーの実像の把握を困難にする別の設定を分析するにあたって、本作は小説でありながら、改訂せずとも演劇脚本として流用可能な叙述形式を採用している点に着目したい (French, *John Steinbeck* 87)。従って本作の人物描写は、作中人物の発話とト書きに相当する外面描写が大半を占める。ところがスリム描写に関しては、“the few departures from his [Steinbeck’s] dramatic objectivity in the narration” が生じている (French, *John Steinbeck* 90)。具体的には、スリムの人物像の本質に立ち入った抽象的叙述が、以下の通り詳細に展開し、他方、服装や体形などの外面に関しては詳述されない。

[Slim] moved with a majesty only achieved by royalty and master craftsmen. . . . There was a gravity

⁷ 例えば、触感を楽しんでいる二十日鼠の死骸を捨てるようにとのジョージの指示に、レニーは根強い不服従を示す (19-20)。また子犬を入手できる可能性を知って興奮したレニーは、食事に関するジョージの指示を黙殺する (66-67)。さらには子犬の入手後、レニーが子犬の触感に耽溺し、ジョージの指示を無視するであろうことを、ジョージは確信している (70)。

in his manner and a quiet so profound that all talk stopped when he spoke. His authority was so great that his word was taken on any subject. . . . His ear heard more than was said to him, and his slow speech had overtones not of thought, but of understanding beyond thought. (61-62)

以上の、叙述形式の統一性から逸脱した描写は、スリムの威厳、周囲の人々への影響力や支配力の大きさ、判断力と理解力の卓越性を事実として断定的に伝え、読者の裁量によるスリム像の解釈を不可能とする。加えてスリムは“God-like eyes” (72) の持ち主とも描写される。以上の結果、スリムは“a benevolent authority” (Hadella 29)、“a minor god” (Levant 136)、“a God figure” (Lisca, *John* 82) や“the most intelligent character in the story” (Parini 229) と位置付けられている。あるいは、“[Slim] understands everything that Mr. Steinbeck understands” (Doren 89). と、スタインバックが作品世界に対して有している全知の立場を、スリムが共有しているとも解釈される。

さらに Richard Astro は、スリムが、ジョージとレニーの土地獲得の夢が失敗する将来を予見しているとして、彼の先見の明の鋭敏性を指摘している (106)。同様に Jay Parini も、スリムのみが、2人の夢が実現しない将来を把握していると捉え (229)、彼の洞察力を強調する。しかしながら、ジョージはスリムと初対面の際に、“‘An’ I ain’t so bright neither. . . . If I was bright, if I was even a little bit smart, I’d have my own little place, an’ I’d be bringin’ in my own crops, ’stead of doin’ all the work and not getting what comes up outa the ground’ ” (71). と発言している。ここでジョージは、土地を入手できるだけの才覚を自身が持ち合わせていないことを力説し、土地獲得に関する諦念のみをスリムに伝えている⁸。しかも、その際にスリムは、ジョージが表白した諦念に全く感応していない。このようにスリムは、ジョージが土地獲得を断念しているとの、事実と反する情報しか得ていない。また、ジョージとレニーが土地獲得への憧憬（真情）を農場で一度、表白した際も、それを耳にするのはキャンディのみで、スリムは近辺にはいない (100-3)。従ってアストロとパリーニによる、スリムに関する指摘は作品内容と齟齬をきたしている。このような、作品内容に即さない、スリムの洞察力の卓越性を強調する解釈が生じたのは、先のスリムの紹介文 (61-62) に引きずられた結果と推測できる。

以上の通り、批評家によるスリムに係る解釈を概観すれば、スリムの紹介文 (61-62) は、彼の全知の立場や判断力の卓越性を、絶対的なものとして読者に受容させることに成功しているといえる。そのようなスリムは、レニーとの初対面直後に、“‘He’s [Lennie] a nice fella . . .’ ” (73)、“‘I can

⁸ ジョージは、土地の入手計画にキャンディが参画することが決まった直後に、“‘Don’t tell nobody about it [our dream]. Jus’ us three [George, Lennie, and Candy] an’ nobody else. They li’ble to can us so we can’t make no stake’ ” (108). と述べている。この発言から分る通りジョージは、夢を他人に知られることが、悪意に基づく妨害を招くと思ひ込み、夢について口外しないようキャンディに指示している。このような警戒心をジョージは持つため、初対面のスリムに、土地獲得を端から諦めているとの虚偽情報を伝えるのは極めて自然な対応である。

see Lennie ain't a bit mean'”(74)、“[Lennie] ain't mean...”(76). と述べ、レニーの人柄を繰り返し賞賛している。ただしスリムは初対面直後に、レニーの実態を知る由もない中、レニーの人間性を唐突に賞賛し始めている。従って、スリムによるレニー評価は、第一印象のみに依拠した、主観に過ぎない。しかし判断力の卓越性が強調されているスリムが、レニーの賞賛を反復すれば、それが如何に空疎なものであろうとも、読者は、受容する以外の選択肢がない⁹。しかも複数の作中人物が、レニーに対し、スリムと類似した評価を下している。この点を以下に確認する。

レニー以外の農場の労働者は皆、カーリーの妻の不義を疑っている。加えて好戦的なカーリーも妻の不義を警戒している。そのようなカーリー（しかも農場のオーナーの息子）との悶着が生じることを恐れ、農場の労働者は、カーリーの妻との近接を忌避する。その結果、カーリーの妻は、孤独と会話への渴望に日常的に苛まれている (135, 150, 152)。その一方でレニーは、彼女とカーリーとの関係を理解できないため、他の労働者とは異なり、彼女との対話を完全には拒絶しない。そのため彼女は、レニーとは例外的に会話を交せ、孤独と会話への渴望を一時的にはあるが癒される。その結果、彼女はレニーを“a nice guy” (152)、“a kinda nice fella” (156) と、スリムと同様に、評価している。

次にクルックスに注目すると、彼は、農場の労働者（全員が白人）から、黒人であるために忌避される。実際キャンディは、クルックスの居住エリアへの近接を敬遠している (130)。一方、レニー（白人）は人種の判別ができない。そのためレニーは例外的に、他の白人が忌避するクルックスの部屋に自発的に入室し、彼に語り掛ける。このようにレニーはクルックスに、白人に対する場合と同一の対応を行い、結果的にはあるが、クルックスは人種差別から解放される。また、クルックスも差別ゆえに、会話への渴望感と孤独感に苛まれている (124, 127-28)。ところがレニーは、クルックスに発話の機会を提供し、結果的に、クルックスを苛む孤独と会話への渴望も癒す。その状況を受けて、クルックスもレニーを“a nice fella” (144) と評価する。さらにキャンディに注目すると、彼は高齢の身体障がい者であるため、将来の不安に苛まれている (106-7)。ところが夢と現実を完全に同一視するレニーの言動に感化されたキャンディは、土地を獲得し自立的な生活を送る夢に、現実性を見出せる (130, 132-33, 138)。その結果、キャンディはレニーと夢に関する対話を行っている間は、将来への不安から逃避できる。その結果、キャンディもレニーを“such a nice fella” (164) と評価する。

しかし実際のレニーは、クルックス、カーリーの妻、キャンディと対話を行う際に、触感が心地

⁹ ここで注目すべきは、キャンディの老犬とレニーの処遇を仲間内で合議した際の、スリムの振る舞いだ。両方の場面ともスリムは、最初に提案された意見に雷同して、カールソンとカーリーが主張した、老犬とレニーの殺害を追認している (81, 85, 168-69)。この展開は、スリムの周囲への影響力の絶大性を強調した紹介文 (61-62) と完全に齟齬をきたしている。他方、レニーとジョージの実像の粉飾を主目的として、スリムは導入されていると仮定すれば、この目的に寄与しないスリム描写には緻密な配慮が払われなかったため、スリムの紹介文と実態との間に不整合が生じたと説明できる。

よいもの（兎、子犬）の話題¹⁰に常に没入し、それ以外の話題には全く関心を示さず、相手の感情の高揚にも完全に無反応である。従って、レニーの真意とは無関係に、クルックス、カーリーの妻、キャンディを苛む孤独や不安の解消は生じている。しかしながら3人は全員、そのような実情を把握できないまま、レニーとの遭遇時に偶然生じた慰撫的状况ゆえに、レニーの人格を賞賛している。このように、作中人物がレニーに対して一致して下す肯定的評価は、スリムによるものも含め、一様に実体を欠き空疎だ。しかしながら、レニーへの肯定的評価が複数の作中人物から反復的に下されれば、それらに、読者のレニー評価は感応せざるをえない。この点を例証するのが、“[Lennie] is, for example, marked by kindness. . . . Lennie is sensitive to the small and the forlorn . . .” (Timmerman 100). という、レニーの実像とは適合しない指摘だ。

ここで、レニーのクルックスに対する対応が、“Lennie smiled helplessly in an attempt to make friends [with Crooks]” (119). と描写されている点に注意したい（下線部は筆者）。下線部が伝える、クルックスへのレニーの友好性は、クルックスの発言や感情に完全に無反応で、自己の興味のみ常に没入しているレニーの実態に反する。つまり作者は、実情と齟齬をきたすレニー描写を行っている。しかし、そのようなレニー描写は、クルックスによるレニーへの肯定的評価の根拠となり、その説得力を増す。以上のような、レニーの実像を糊塗する設定は他にも見られる。

既出の通り、作品の客観的俯瞰によれば、レニーは自己の利益への執着ゆえに、カーリーの妻を殺害していた。ここで、本作の叙述形式が、演劇台本への転用が可能である事実 (French, *John Steinbeck* 87) を再度、視野に入れたい。実際に人物描写を眺めると、台詞や外見の客観的描写が大半を占めている。ところが本作には、“the few departures from his [Steinbeck’s] dramatic objectivity in the narration” が認められる (French, *John Steinbeck* 90)。その一つが、レニーに殺されたカーリーの妻の死に顔に関する、“And the meanness and the plannings and the discontent and the ache for attention were all gone from her face” (160-61). との叙述である。ここで作者は、状況の本質にまで立ち入った、例外的な解説を行っている。このような、叙述の統一性を乱す描写は、彼女の死を、現世の苦悩からの解放と位置付けている。加えて彼女の死に顔は、“She was very pretty and simple, and her face was sweet and young” (161). と描写されている。この主観性が色濃い描写は、死に顔に認められる生氣のみを伝え、死体としての実態を糊塗する。以上の、作品の統一性から逸脱した2描写は、レニーの殺人を、苦悩から彼女を救済する出来事として脚色し、レニーの殺人の害悪性を後景化する。他方、死直前の彼女は、“[H]er eyes were wild with terror” (158). と描写され、これは、直後の、死に顔の美しさと安らかさを強調する描写 (160-61) と完全に齟齬をきたしている。つまり、先行描

¹⁰ この話題には、レニーの脳裏において、兎の飼育と何らかの形で関連している事物も含まれる。例えば、レニーはジョージに自発的に言及する頻度が高いが、その際にジョージは、兎の飼育を可能にする人物として度々、認識されていることは既に確認した。

写との関係において、不自然と考えられる死に顔の美化を敢えて作者は行っている。そうであれば、死に顔の描写の背後に読み取れるのは、レニー像の美化を目指す作者の明瞭な意匠なのだ。

以上の通り、レニーの実像を不明瞭にする多彩な設定が張り巡らされている一方、レニーの実像の把握のためには、作中に散在している複数の描写を総合する必要がある。このように、レニーの実像の把握には二重の困難が伴うように工夫が凝らされている。実は、このようなレニー描写の独自性は、ジョージの人物描写にも等しく指摘できる。

最初に、レニーに発言を強要したカーリーに対して、ジョージが激怒する場面に注目したい (49-51)。他方、既出の通り、レニーに反感を持っていることが自明のカーリーを、ジョージは率先して挑発していた (67)。また、カーリーがレニーを殴打した際、ジョージは、レニーの私刑を招く可能性があることを認識しつつ、反撃をレニーに3度も命令していた (111)。このようにジョージは、レニーの安全への配慮を著しく欠いている。他方ジョージは、レニーへの支配力の行使に固執している。例えば彼は、鼠の死骸の放棄をレニーに命令すると、その命令にレニーを服従させることに強く固執する (20)。その後、ジョージがレニーに夕食の準備を命じた際も、レニー単独で準備を行わせると時間を浪費するにもかかわらず、ジョージは休息状態を維持しつつ、レニーを命令に服従させている (22-23)。さらに、無言を貫徹するよにとの命令にレニーが僅かに反した際も、ジョージの叱責は苛烈を極める (44-45)。以上の諸状況を総合すれば、レニーに発言を強要したカーリーへのジョージの怒りは、彼が特権的に行使しているレニーへの支配権を、カーリーが侵害したことに起因していると考えるのが妥当だ¹¹。しかし、ジョージの怒りを単独で眺めると、レニーをカーリーが威圧したことに起因しているとしか解釈できず、ジョージのレニーへの保護者性が印象付けられる。

次に、カーリーの妻を殺害したレニーへのジョージの対応を確認すると、彼は、逃亡したレニーが隠れている場所に急行し、カーリーの手による悲惨な私刑を回避するため、自らの手でレニーを射殺する。この行為におけるジョージの友愛や愛他性は、批評家によって一様に指摘されている (Astro 105, 108, French, *John Steinbeck* 90, Goldhurst 49, Hadella 63, Levant 136, Lisca, “Escape” 82, Parini 230, *Times Literary Supplement* 94)。スタインバックも、*Steinbeck: A Life in Letters* (以下 *Letters* と略記) に所収の書簡において、レニーを自らの手で射殺する際のジョージはヒーローであると評価している (563)。しかもこの場面には、伏線が準備されている。それは、病に苦しむ老いた愛犬が殺害される運命に陥った際に、キャンディが、その殺害を冷酷で無神経なカールソンに委ね、飼主としての責任を放棄する展開だ (84-86)。このようなキャンディの行動との対照性が加味されるため、自身でレニーを殺害したジョージの配慮の篤さは更に際立つ (Fontenrose 55, Hadella 62, Owens, *John*

¹¹ この解釈は、ジョージの夢の本質を確認することにより、補強される。つまり、夢が実現した暁に享受できる魅力として、雇人への支配力の獲得 (103) をジョージは想定しており、彼は他者への支配力の保持に特段の意義を見出している。

104, Timmerman 98)。その上ジョージは射殺の際に、追手が到着する直前まで、レニーが熱望する夢の語りを継続し、レニーに対して最大限の配慮を示している。しかし、以上のジョージの対応はレニーの落命直前という例外的状況でなされており、一般的行動と捉えることはできない。しかし、主要登場人物の射殺という重大な出来事と関連しているため、例外的行動であっても、ジョージの配慮の篤さは印象的に映る。このように、ジョージがレニーに例外的に示す純粋な配慮が、読者の記憶に刻印を残しやすい構成も採用されている。

次に視点を変えて、作中人物が下すジョージ評価に注目すると、スリムは、ジョージをレニーの保護者と初対面直後に断定し、ジョージがレニーに対して示す責任感を何度も賞賛している (71)。スリムの発言に、特段の説得力が伴うよう、作者が工夫している点は既に確認した。さらには、レニーの幻想として登場する Aunt Clara も、“‘Min’ George because he’s such a nice fella an’ good to you’ ” (175). と述べている。同様にレニーの幻想として登場する巨大兎も、“‘... George done ever’thing he could to jack you outa the sewer ...’ ” (177). とレニーに述べている。このように、ジョージに下される同一の評価は回数が多いため、それらは空疎なものであっても、読者の判断に影響を及ぼすだろう。以上の通り、ジョージのレニーへの保護者性を読者に印象付ける多彩な設定が指摘できる。さらにカーリー描写にも、以下の通り、ジョージの人物像を脚色する効果が認められる。

カーリーは卑劣な打算に基づいて喧嘩相手を選択し (50)、身体障がい者の老人、キャンディにも容赦なく暴力を行使し (51)、憂さ晴らしのために、完全に無抵抗なレニーを激しく殴打し、重傷を負わせている。その結果、カーリーの暴力の描写は読者の嫌悪感を刺激し続ける。一方、ジョージの命令に基いたレニーの反撃によって、カーリーの片手は完全に粉碎され、忌わしい彼の暴力は行使不能となる (137)。この帰結は、彼の無軌道な暴力性への懲罰的色彩も帯びている。さらには、カーリーの片手 (レニーが粉碎した方であるかは不明) は通常、ワセリンで満たされた手袋を着用している。その理由が“softens the hand that strokes his wife’s genitals” (Spilka 64) であることを、カーリーは吹聴し、それは周囲の不快感を招いている (52)。そうであれば、手袋の着用の継続を困難とする、彼の片手の粉碎は、周囲の不快感の消滅も意味する。加えて、レニーがカーリーの手を粉碎した際に、当然生じているはずの流血や表皮の損傷の描写は皆無で、重傷の視覚面は伝えられていない¹²。その結果、レニーの対カーリー暴力は残虐性が排除され、片手の粉碎という凄惨な状況を生みながらも、読者の嫌悪感を刺激する可能性は減少する。以上に確認した諸設定は、カーリーの片手の粉碎を読者に歓迎させる方向性を有している。読者が、レニーの対カーリー暴力を歓迎した場合、ジョージが私怨から、レニーの怪力を活用してカーリーに攻撃を加え、レニーを私刑の危険に曝した在り方 (既出) を、読者が問題視する可能性は低下するだろう。このようにカーリーの諸

¹² MGM 配給により 1992 年に公開された、『二十日鼠』の映画化作品における同一場面 (65 分経過時) では、レニーに粉碎されたカーリーの拳から、大量に出血する様子が描かれている。

描写は、ジョージが利己的姿勢からレニーを生命の危機に曝している実情を不分明化する効果を有している。

一方で、この場面におけるカーリーによるレニーの殴打の結果は、“Blood welled from his [Lennie’s] nose. . . . The big face was covered with blood. . . . Blood ran down Lennie’s face, one of his eyes was cut and closed” (111-12). と記述されている。カーリーの手の粉碎に関して流血描写が皆無であったのとは対照的に、レニーの流血や肉体損傷の凄惨さが詳述されている。この状況を前提とすれば、レニーに対するジョージの反撃命令は妥当としか判断ができない。そうであれば、レニーとカーリー、各々が行使する暴力の描写は、読者に与える印象は対極的ながら、レニーへのジョージの反撃命令がレニーの命を危険に曝している実情を、読者が認識し難くする点で、軌を一にしている。このように、ジョージの実像の把握も作品全体の鳥瞰が不可欠な上に、実像を糊塗する多彩な設定も準備されている。

以上の通り、ジョージとレニーの本質から乖離した在り方（虚像）を実態と読者に認識させる多彩な設定が、入念に準備されている。その結果、叙述様式の統一性の崩壊や、諸描写間の齟齬が生じている。そうであるならば、読者を2人の虚像へと誘う意匠に作者は、作品の統一性の維持以上の重要性を認めている。その一方で、スリム描写とは異なり、レニーとジョージの人間性の本質が、作者の視点から直接的に明示されることは一切ない。彼らの実相を把握するには、作中に散在する複数の描写を総合的に判断することが不可欠であった。以上のような、作中人物の本質の把握を二重の次元で困難にする、個性的な作品構成を作者が導入した動機を、以下に考察したい。

IV 対読者の戦略的描写の導入理由

レニーは知的障がいを持つため、ジョージが口述する夢の内容に、現実と同等の存在性を常に認め、実存物に対する場合と同一の反応を示す。このような、口述内容を現実と同等視するレニーの態度に感化された結果、ジョージ、キャンディ、クルックスは、実体を伴わない夢を現実的存在と誤認している。その間、彼らは、過酷な現実を直視せずに済む¹³。この点は、レニーが殺害される運命が確定した直後の、“—I think I knowed from the very first. I think I knowed we’d never do her [our dream]. He usta like to hear about it so much I got to thinking maybe we would’ ” (164). との、ジョージの独白にも読み取れる。この表白は、レニーの言動に伴う、非現実を現実と誤認させる感化力をジョージは認識しながらも、その意識化を避けることにより、現実逃避に身を委ねてきた事実に言及している。このように、作中の主要登場人物は、錯誤的な現実認識を共有している。この在り方は、別の様態でも見られる。

¹³ ただしクルックスの場合は、突然闖入してきたカーリーの妻の人種差別発言によって、現実直視を強いらられるため、レニーとの関係に起因する現実逃避が成立するのは至極、短時間である。

キャンディは病に苦しむ老犬を飼育しているが、その老犬に関して説明する際には、犬が若かった時分の記憶に没入し、若かった時の牧羊犬としての能力の卓越性に専ら言及する (46-47, 80)。このようにキャンディは、老犬の現状が直視できていない。さらにクルックスも、レニーとの会話の際に、白人から苛烈な差別を受けている現在とは対照的な、白人の子供との円満な交友を享受できていた子供時分の記憶を滔々と語っている (123)。やはり、非現実 (過去の記憶) に逃避するクルックスが描かれている。さらにカーリーの妻もレニーに、過去に映画出演ができた可能性について延々と語り (152-54)、キャンディとクルックスとの会話の際にも、同じ話題を脈絡なしに持ち出している (137)。彼女も、実体を欠いた希望的観測に過ぎず、かつ、現存もしていない過去の記憶に没入している。そうすることにより彼女は、孤独感に苛まれ続ける現状の苦しさ (150, 152) からの逃避を目指している。さらにはジョージも、自身の子供時分の過去を回想する際の口調は “raptly” と記述され (103)、カーリーも、過去のボクシング大会での彼の決勝進出を伝える新聞記事の切り抜きを後生大事に保管し、それを周囲に誇示している (96)。このように、非現実である過去の記憶に囚われ、過去という非現実には、現実と等しい存在感を認める錯誤も、複数の作中人物が共有している。さらに現実認識における錯誤は、作中人物が下す人物評価においても類発する。

カーリーの妻が、他者への昔語りを熱望している点は既に確認した。しかし彼女は皆から忌避され、その思いを遂げられない (135, 150)。ところが、レニーは他の労働者とは異なり、彼女を敬遠できないため、彼と2人きりの際に、彼女は熱望していた昔語りをレニーに対して行う。ところが彼女は、回顧へのレニーの完全な無関心を確認するや、自己の願望には執着せず、レニーが好んでいる、触感がよい事物に関する話題を譲歩的に持ち出す (155-57)。加えて彼女は、小犬を死なせて落胆するレニーを繰り返し慰撫し、代替となる子犬の入手の容易さを強調し、レニーの悲嘆の軽減にも努めている (151)。彼女は以前にも、レニーが兎飼育を熱望していることを知るや、即座にレニーへの兎の提供を申し出ている (140)。以上に見られる、他者の感性に配慮を示す彼女の姿勢は、作中人物において例外的なあり方だ。実際に、“benevolent” (Hadella 29) と評されるスリムですら、食あたりで腹痛に苦しむキャンディに救護的姿勢や同情を全く示さず、冷淡な発言に終始している (78-79)。

ここでカーリーの妻に対する、他の作中人物の評価を確認したい。彼女がレニーに殺害されたことによって、私刑によるレニーの死が確定する。その結果、レニーの言動の感化力によって維持されていた、キャンディの楽観的な将来設計は瓦解し、彼は過酷な現実の直視を余儀なくされる。この状況を招いた元凶としてキャンディは、死後のカーリーの妻を、“‘Ever’body knowed you’d mess things up. You wasn’t no good. You ain’t no good now, you lousy tart’” (166)。と痛烈に罵倒している。このようにキャンディは、先ほど確認した彼女の本質を全く把握できていない。加えて、2人きりになった際のレニーへの発言から分る通り (150, 152)、カーリーの妻は、夫の独占欲ゆえに生じる

孤独感を慰撫するために、他者との接近を試みている。そのような彼女を、男性を悶着に巻き込む危険人物として、農場の労働者は誤認している (52-53, 59-60, 91-92, 99)。このように、彼女の本質が作中人物に正当に評価されることはない。他方、カーリーの妻の人物像に関してスタインベックは、以下の通り書簡で指摘している。

[I]f you knew her [Curley's wife], if you could ever break down the thousand little defenses she has built up, you would find a nice person, an honest person, and you would end up by loving her. But such a thing can never happen. (*Letters* 155)

以上の、カーリーの妻の“nice”という本質の分り辛さを指摘する作者の発言は、作中人物が遍くカーリーの妻の本質を誤認していると解釈する本稿の立場を裏打ちする。つまり、作中人物全員がカーリーの妻の本質を誤認する在り方は、作者の意匠に即して生成されている。

他方、批評家もカーリーの妻を、“The principle of evil”、“a poor little prostitute infected by egoism” (Canby 76)、“essentially hateful” (Collins 91)、“stupid” (Fontenrose 55, Parini 229)、“knowingly evil” (Levant 139)、“a young woman of questionable character” (Oliver 75)、“tantalizing” (*San Francisco Call* 77)、“the foolish jade” (S.W. 89)、“selfish” (Timmerman 111) と、一様に否定的に解釈している。さらに Howard Levant は、彼女の死は同情を全く喚起しないと断じている (138)。同様の指摘は、彼女のクルックスに対する人種差別的発言を根拠としてもなされている (French, *John Steinbeck* 90)。しかしながら、キャンディはクルックスの部屋への入室を忌避し (130)、ジョージも、レニーにクルックスの部屋への入室を禁じ、その禁を破ったレニーを咎めている (144)。一方でカーリーの妻はクルックスの部屋への入室に違和感を示しておらず、この点で、他の白人よりも黒人への差別的姿勢が希薄である。しかし、この事実が考慮の対象となることはない。このように、作中人物が一致してカーリーの妻に下す、誤解に基づいた評価に同調する形で、読者による、彼女の人物評価はなされている。

次に、既に議論した、作中人物によるレニー評価を再確認すると、洞察力の卓越性が強調されているスリム (61-62) は、初対面時の印象のみに基づいて、レニーの善良さを賞賛し続けていた (73, 74, 76)。キャンディも、カーリーの妻を殺した直後のレニーを“such a nice fella” (164) と評価し、同様にカーリーの妻も、彼女を殺害する直前のレニーの人柄を称賛していた (152, 156)。このような作中人物による、事実に即さないレニー評価を、序論で確認した通り、複数の批評家が共有している。

ついで、ジョージの不注意ゆえに、彼とレニーが、契約で定められた到着時間に大幅に遅刻した点に注意したい。農場のオーナーは彼らの遅刻に激怒していることから (35)、この遅刻が午前中に

招いた支障の大きさが分る。そうであれば、遅刻は、ジョージとレニーが入る予定であった班を統率するスリム (44) にこそ、多大な不都合をもたらしたはずだ。実際にスリムは、不適格な労働者2名を使つての作業を午前中は余儀なくされ、仕事に支障が生じたことをジョージに伝え (63)、ジョージの遅刻が招いた問題点を具体的に説明している¹⁴。そのような、不手際を犯したジョージをスリムは、“a smart little guy” (71) と評価し、やはり、現実に反する判断を下している。他方、不注意に根差す遅刻で農場に迷惑を及ぼしたのみならず、儉約に特に徹すべき状況が新たに生じたにも関わらず濫費を続ける (後述) ジョージを、批評家は“resourceful” (Astro 104)、“clever” (Goldhurst 49)、“shrewd” (Jackson 79)、“intelligent” (Loftis 43, McCarthy 59, Rascoe 61)、“keen-witted” (Marsh 80) と評価している。つまり、スリム (61-62) がジョージに下した評価と、読者の解釈とは、一致している。

以上の通り、作中人物が周囲の人々に対して下し続ける錯誤的な人物評価と、読者が行う作中人物評価とが、ことごとく、足並みを揃える展開を本作は生成している。このような、作中人物の認識と、読者の解釈との合致が生じたのは、読者の解釈が、作中人物の発言に影響を受けた結果と推測できる。

本章で明確化した通り、作中人物は一樣に印象や主観に囚われて、現実認識や他者の人物評価に関して錯誤を犯し続けている。そうであるならば、作中の現実や人物像を的確に把握できなかった際の読者は、スリム、キャンディ、カーリーの妻などの作中人物と同一地平に立つことになる。このように『二十日鼠』は、作中人物の、非現実を現実と捉える認識の方向性を、読者に共有させる作品構造を有している。以上に確認できた、作中人物の立場を読者に追体験させる作品構成は、スタインベックの創作にあつては、例外ではない。

例えば *The Grapes of Wrath* (1939) の7章の文体は、作中人物が耳にする車のエンジン音を読者に連想させ (Timmerman 108)、同時に、作中人物が体験している混乱を読者に共有させる (Owens, *Grapes* 93)。加えて作者は、『怒りの葡萄』に関して、“Throughout I’ve tried to make the reader participate in the actuality [of *The Grapes of Wrath*] . . .” (Letters 178)。とも述べており、作中人物が置かれた状況を読者に追体験させることに意欲を示している。次に、このような作品構造が、『二十日鼠』においても採用されている理由を考察したい。

ここで、作中人物の知的水準を確認したい。既出の通りジョージは、契約書に記載された農場への到着時刻の確認を怠った結果、遅刻によって雇主を激怒させていた。その後、350ドルの持参金を持つキャンディが、土地の購入計画に参入する。その結果、ジョージとレニーが節約に徹すれば

¹⁴ この際のスリムのジョージに対する言動は、“kindly” (62)、“gently” (62)、“gentle” (63)、“approvingly” (63)、“friendly” (63)の単語によって修飾されているため、好意的な雰囲気が際立っている。かつ、ジョージを咎める言動も絶無であるため、スリムがジョージの不手際と言及している実情は読者に伝わり辛い。ここにもジョージの実像を不分明にする設定を指摘できる。

1ヶ月間に貯蓄できる額（100ドル）を持ち寄ることにより、売値600ドルの土地を入手できる可能性が一気に高まる（104-8）。それにもかかわらずジョージは、その直後に同僚と街の cat house に出かけている。街での彼の行動の詳細は不明だが、平素の彼の、トランプ札への執着の強さを踏まえると、賭博での濫費が容易に推測される。またジョージは、節約の必要性を認識しつつも、cat house で一杯25セントの酒を数杯注文することを考えている（94）。このように彼は、土地購入の実現性が急激に高まった中においても、刹那的な感情に流されて浪費を続けている。またジョージとホイットは、街にある2軒の cat house の話題に熱中し、週末にはジョージとスリムを含めた、農場のほぼ全員が cat house に繰り出している。さらに彼らは、pulp magazine に掲載の、移動労働者が投稿した幼稚な感想文に強い興味を示し、賭け事の蹄鉄投げに熱中している。以上の通り、事実誤認を特徴とする作中人物の知的水準は、遍く低位に設定され、彼らは“ignorant”、“sweat-soaked beasts of the fields”（Paul 84）と評されている。唯一の例外はクルックスで、彼は読書を嗜み、自己の経験から人間の本質を帰納できる知力を有している（127-28）。しかしながら、彼は黒人であるため、“ostracized from the communal bunkhouse”との状況に置かれ（French, *John Steinbeck's* 73）、共同体（農場）の正規の構成員とは認められない。

ここで、知力の優劣と、現実把握の正確性との相関関係を描いている *East of Eden* (1952) を視野に入れたい。本作で、Cyrus Trask は南北戦争時に従軍するが、負傷ゆえに30分しか参戦できない。ところが、彼の立ち居振る舞いから周囲の人々は、彼を Lincoln 大統領の信頼が最も篤かった、軍に関する相談役であったと誤認する（18）。対照的に、彼の小学校に上がったばかりの息子は、父親の実像を正確に見抜く（20）。この展開ゆえ、サイラスの実態を把握できない世間の人々の洞察力は、幼少の子供に劣るものとなる。また、Cathy Ames は両親を焼殺して父親の金を盗み、策を弄して自分自身を誘拐の被害者として偽装する。キャシーの策略に騙された結果、警察は無実の人物を被疑者として逮捕し、殺人の実相を見抜けぬ（86-89）。このような事実誤認が生じたのは、警察が分析力と観察力を欠いており、先入観に根ざした捜査しか行えないからだ。以上の通り『エデンの東』は、知力と現実認識の正確さとの相関関係を提示している。そうであれば、『二十日鼠』の読者が作中人物と足並みを揃え、作中現実に関する誤認を行った場合、読者の知的水準は、その瑕疵が描写基調となっている作中人物と同一の地平に導かれる。このような帰結を生み出す、奇矯とも映る作品構造が採用された理由は、書簡集を紐解くことにより判明する。

1930年（『二十日鼠』脱稿の6年前）に執筆の書簡においてスタインベックは、自作の売れ行きが芳しくないため、経済的理由ゆえに、芸術家としての誠実さを犠牲にした、読者への追従を強いられることを嘆いている（*Letters* 32）。1932年にも読者が自作を買わないことへの嘆きが、書簡で述べられている（*Letters* 54）。また、1933年には、批評家の自作への謬見に反論し、批評家を“lice”と罵倒している（*Letters* 68）。1934年には、読者から寄せられた作品批判に対する反論として、読

者の不注意を指摘している (*Letters* 94)。1935 年には、*In Dubious Battle* (1936) に対する編集者の偏見を延々と嘆き (*Letters* 107-8)、アイルランド自由国が彼の作品を “the censored list” に載せたことに関して、彼らを “The dirty rednecks” と罵倒している (*Letters* 116-17)。このように『二十日鼠』の脱稿前に、読者の対作品姿勢にスタインベックが覚えていた強い苛立ちや不快感が、一般公開を念頭に置かない書簡には頻出する。

書簡のみならず、1938 年に打電された “The Critics’ Circle” 宛の電報においても、批評家を “AUTHORS NATURAL ENEMIES” と常に位置付けてきたことをスタインベックは表白している (*Letters* 164)。スタインベックは公表を前提とした文章においても、自作への批評を “valueless” (“Letter” 52)、“violent”、“unfair”、“ferocious” (“Critics” 48) と位置付けている。さらに、そのような批評の傾向が生じるのは、元々作家になることを目標としていた批評家が、その目標に到達できず、作家への怒りを覚えているが故と説明し (“Critics” 49)、批評家への軽蔑を吐露している。以上の通りスタインベックは、読者の自作品への反応に怨嗟の念を抱き続けている。他方、1930 年代に書かれた書簡 (*Letters*) において彼は、作品に対して読者が示すのが当然の反応や (91, 96, 105)、妥当な作品の読み方 (51, 89, 94) を指摘し、適格な読者のみが彼の作品を読むべきとまで主張している (99)。このようなスタインベックの認識が前提としてあれば、批評家を含む読者への、スタインベックの不快感が昂じるのは必定である。

以上の、スタインベックの対読者姿勢を視野に入れば、『二十日鼠』に見られた、作中人物の現実認識の在り方を読者に共有させる作品構造は、書簡において、時として激烈に吐露されている読者の知力への批判を、別様式で展開したものと解釈できる。読者が作中人物に対して行う解釈を利用することにより、読者側での自覚が極めて困難な形で読者批判を目指した点に、本作の作品構造の本質が認められる。一方『二十日鼠』に関する批評家の解釈が物語る通り、読者は観察力の点で作中人物と同一地平へと誘導されており、作者が目指した読者批判は実現している。

結 語

『二十日鼠』に関してもスタインベックは、“a lot of nonsense” が批評家によって指摘されていると述べ、好意的な評価も “flattery” と位置付け、防御の必要性を主張している (*Letters* 135)。また彼は、一般読者から寄せられた手紙に書かれていた本作への誹謗の不遜さと、その送り主に返金を以て対処した過去を、送付者の実名を含めて、知人宛の書簡で詳述している (*Letters* 163)。このようにスタインベックは、読者の『二十日鼠』への反応にも一貫して過敏に反応し、読者／批評家への対峙姿勢を継続している。

他方、『二十日鼠』への批評家の指摘に対して、作品内容に具体性に言及しつつ作者が応答することは、雑誌や書籍などの一般公開を前提とした文章においてはなかった。他方スタインベック

は、カーリーの妻の実像の分り辛さを指摘し (*Letters* 155)、レニーを射殺する場面のジョージの行動を評価し (*Letters* 563)、レニーの夢に彼が込めた意匠を解説している (*Lisca, Wide* 134)。しかし、これらの記述は全てが、公開を前提としない個人宛の書簡においてなされている。また『二十日鼠』執筆中もスタインベックは、本作に関するコメントを殆ど公表していない (*French, John Steinbeck's* 73)。一方、スタインベックが批評家への応答の形で、『二十日鼠』の各登場人物の本質につながる発言を行えば、読者に作中人物の実像を把握する糸口を与えるため、この点について、作者が情報を読者に提供しないのは当然といえる。読者の作品批判に対するスタインベックの先鋭的意識を源泉とする、人物描写の複雑性と特異性は、スタインベックによって公言されることが不可能で、かつ、読者による認識が及ばない点にこそ本質が存し、この点で、作者の究極的に私的な領域において展開した創作といえるのだ。

Works Cited

- Astro, Richard. *John Steinbeck and Edward F. Ricketts: The Shaping of a Novelist*. U of Minnesota P, 1973.
- Benson, Jackson J., ed. *The Short Novels of John Steinbeck*. Duke UP, 1990.
- Brighouse, Harold. "New Novels: Archers of the Long Bow." *McElrath* 92-93.
- Butcher, Fanny. "Books." *McElrath* 75-76.
- Canby, Henry Seidel. "Casuals of the Road." *McElrath* 76-77.
- Collins, Dorothea Brande. "Reading at Random." *McElrath* 90-91.
- Doren, Mark Van. "Wrong Number." *McElrath* 88-89.
- Fontenrose, Joseph. *John Steinbeck: An Introduction and Interpretation*. Holt, Rinehart and Winston, 1963.
- French, Warren. *John Steinbeck*. Twayne, 1975.
- . *John Steinbeck's Fiction Revisited*. Twayne, 1994.
- Gannett, Lewis. "Books and Things." *McElrath* 73-74.
- Goldhurst, William. "Of *Mice and Men*: John Steinbeck's Parable of the Curse of Cain." *Benson* 48-59.
- Hadella, Charlotte Cook. *Of Mice and Men: A Kinship of Powerlessness*. Twayne, 1995.
- Jackson, Joseph Henry. "Steinbeck's Art Finds Powerful Expression in *Of Mice and Men*." *McElrath* 78-80.
- Levant, Howard. *The Novels of John Steinbeck: A Critical Study*. U of Missouri P, 1988.
- Lisca, Peter. "Escape and Commitment: Two Poles of the Steinbeck Hero." *Steinbeck: The Man and His Work*. Eds. Richard Astro and Tetsumaro Hayashi. Oregon State UP, 1971. 75-88.
- . *John Steinbeck: Nature & Myth*. Thomas Y. Crowell, 1978.
- . *The Wide World of John Steinbeck*. 1958. Gordian Press, 1981.
- Loftis, Anne. "A Historical Introduction to *Of Mice and Men*." *Benson* 39-47.

- London Mercury. "Of Mice and Men." McElrath 93.
- Marsh, Fred T. "John Steinbeck's Tale of Drifting Men." McElrath 80-81.
- McCarthy, Paul. *John Steinbeck*. Frederick Ungar, 1980.
- McElrath, Joseph R., Jr. et al., eds. *John Steinbeck: The Contemporary Reviews*. Cambridge U P, 1996.
- Moore, Harry Thornton. "Of Mice and Men." McElrath 86-87.
- Oliver, James Ross. "Book News and Views." McElrath 74-75.
- Owens, Louis. *The Grapes of Wrath: Trouble in the Promised Land*. Twayne, 1989.
- . *John Steinbeck's Re-Vision of America*. U of Georgia P, 1985.
- Parini, Jay. *John Steinbeck: A Biography*. Heinemann, 1994.
- Paul, Louis. "Prose Made of Wind and Soil and Weather." McElrath 82-84.
- Pritchett, V. S. "New Novels." McElrath 93.
- Rascoe, Burton. "John Steinbeck." Tedlock 57-67.
- San Francisco Call. "Steinbeck Touches the Sublime." McElrath 77.
- Spilka, Mark. "Of George and Lennie and Curley's Wife: Sweet Violence in Steinbeck's Eden." Benson 59-70.
- Steinbeck, John. "Critics—From a Writer's Viewpoint." Tedlock 48-51.
- . *East of Eden*. 1952. Rinsen Book, 1985. The Complete Works of John Steinbeck. vol. XIII.
- . "A Letter on Criticism." 1955. Tedlock 52-53.
- . *Of Mice and Men*. 1937. Rinsen Book, 1985. The Complete Works of John Steinbeck. vol. VII.
- . *Steinbeck: A Life in Letters*. Eds. Elaine Steinbeck and Robert Wallsten. Viking Press, 1975.
- S. W. "Current Literature." McElrath 89.
- Tedlock, E. W., Jr. and C.V. Wicker, eds. *Steinbeck and His Critics: A Record of Twenty-Five Years*. U of New Mexico P, 1957.
- Thompson, Ralph. "Books of the Times." McElrath 86.
- Times Literary Supplement*. "Of Mice and Men." McElrath 93-94.
- Timmerman, John H. *John Steinbeck's Fiction: The Aesthetics of the Road Taken*. U of Oklahoma P, 1986.
- Wagner, Charles A. "Books." McElrath 73.
- Weeks, Edward. "The Bookshelf." McElrath 91-92.